

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	先端社会研究所
大項目	0 理念・目的
中項目	
小項目	0.0.1 大学・学部・研究科等の理念・目的は、適切に設定されているか。
要素	理念・目的の明確化 実績や資源からみた理念・目的の適切性 個性化への対応
小項目	0.0.2 大学・学部・研究科等の理念・目的が、大学構成員(教職員および学生)に周知され、社会に公表されているか。
要素	構成員に対する周知方法と有効性 社会への公表方法
小項目	0.0.3 大学・学部・研究科等の理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。
要素	

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 現代社会における先端的な課題に学際的な観点から取り組むことを通じて、広く社会に貢献していく。	→社会状況に即応した先端的な研究テーマの設定と大学外の諸機関・組織との協同の実践状況。	B	B	B	B	A
2. 「ミッションステートメント」に適った関西学院大学独自の研究成果を公表する。	→研究成果に対する内部評価/外部評価の実施状況(運営委員会等での内部評価実施/関連研究者への外部評価の依頼)。	C	C	B	B	B
3. 現実社会から提示される課題や要請に対応しつつ、「共生/移動」、「景観/空間」、「セキュリティ/排除」を主たる切り口とした先端的な学術研究成果に裏打ちされた社会貢献を果たしていく。	→外部組織との協同のもとでの研究会、シンポジウム、Sキューブ事業の実施状況(年間2-3回の実施)	B	B	B	B	A

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2012年度からは「アジアにおける公共社会論の構想—「排除」と「包摂」の二元論を超える社会調査」をテーマとして指定研究を行った。その中で大学外の諸機関・組織との共同研究として、「中国国境/雲南班」が雲南省社会科学院との研究交流として国際会議等を開催し研究員が報告を行ったほか、現地にて共同調査を行った。また「日本班」が大韓民国済州大学校にて開催されたシンポジウムに参加、現地調査も行った。「南アジア/インド班」においても現地調査等の研究活動を実施した。他に2009年度までの共同研究「戦争が生み出す社会」の研究成果が2012年7月より叢書「戦争が生み出す社会」としてI～IIIのシリーズとして刊行された。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 「中国国境/雲南班」においては、今後の効率的な調査活動のために雲南省社会科学院との共同研究契約をおこなった。また「日本班」が済州大学校在日済州人センターと学術交流協定を締結するなど、今後、共同で円滑に研究活動を行える等の効果が期待される状況となった。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今後の本研究所の研究活動を継続するために、2013年度中に各班の研究体制の見直しが行われ、今年度・次年度において、各班のこれまでの成果をまとめるべく書籍等の出版やシンポジウムを開催することとなった。なお、日本班においては「在日コリアン研究」と絞り込み成果を作成していくこと、中国国境/雲南班においては過去における調査研究内容を集約して学会などで発表することとした。	☆
		その他	☆

目標2	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2012年度には研究推進社会連携機構による事業評価を受け、2014年度より予算規模の縮小という形で研究活動を継続することとなった。 運営委員会は神・文・社・経・人福学部からの選出委員に加え、学長補佐が出席することになっており広範囲からの構成となっている他、3ヶ月毎に活動状況報告を研究推進委員会に提出し、継続的に外部からの評価も受けている。なお、2014年4月1日付けにて研究所の機動性を高めることを目的として運営委員の構成を変更している。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 事業評価においては研究所の改編がなされることとなり、予算規模の縮小、事務部門の研究推進社会連携機構への統合等がなされた。また、これを機会に各研究班において今後の方針について検討を行うこととなり、今後2年間にわたり、これまでの成果をまとめていき出版やシンポジウムを行う計画が出された。また、不採択となったが、2013年度には中国国境/雲南班が私学共済事業団の「学術研究振興資金」に申請するなど、新たな資金調達を目指す姿勢を見せた。関連して、同班の林梅研究員が科学研究費・研究基盤Cに「中国雲南省の少数民族における文化変容に関する社会学的研究」のテーマで採択されている。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 従来中国国境/雲南班・日本班・南アジア/インド班に加え、本研究所の研究活動そのものを考えるための「先端企画セッション」を設け、今後の本研究所の改善策等を検討する体制を整えており、研究会の実施なども計画している。また、「先端企画セッション」は学内外にも評価の高いポストGP(大学院教育支援事業)も担当することになっており、本研究所のもう一つの役割を担っていく所存である。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆
目標3	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 中国国境/雲南班・日本班・南アジア/インド班の各指定研究班による研究会を例年は5～9回開催、S(ソーシャル・サイエンス・ショップ)キューブ事業として研究成果の一部を学内外および学生に還元するほか、研究所主催による各期のテーマに則ったシンポジウムも外部の研究機関等に所属するパネリスト等を交え1～2回/年開催し、一般の方々を含め学内外に研究内容の発信を行って来た。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 研究所主催によるシンポジウムは学外の研究者も交えて実施しており、また、一般聴衆も来場し、広く研究内容に関し発信を行えた、特に2011年度に開催したシンポジウム「関西私鉄文化を考える」は100名を超える一般聴衆を集めると共に、成果を出版し広く本研究所の成果を還元できた。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 公開するシンポジウムの広報手段としては、メールマガジン登録者や過去の来場者、学内掲示を中心に行ってきたが、今後、これに加え、報道機関等にもプレスリリースを流すなど、広報範囲を広げることでより多くの方々に研究成果を還元したい。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆
備考			☆